

課題名「ジャン・ヴァールの思想における「経験」の役割」

1. 課題設定の背景

20 世紀フランスで活動した哲学者ジャン・ヴァール（Jean Wahl, 1888-1974）は、長年「哲学史家」として捉えられてきた。しかしヴァールが、キルケゴールやハイデガーの「実存思想」が「実存」を省察対象とするにもかかわらず、結局実存を超越に依拠させることに着目し、実存を構成する超越に向き合うために「超越論的经验論〔empirisme transcendentale〕」や「形而上学的経験」などの概念を提唱したことは、先の研究^{*1}で見た通りである。本研究では、晩年のヴァール思想のなかで次第に重視されてゆく「経験」概念の解明を目指し、上記の研究課題を設定した。本研究の遂行に際しては、「経験」、「形而上学」および「超越論的经验論」などの概念がヴァール思想においていかなる役割を有するか、また、30 年代から示されていた「実存」や「超越」の思想と「経験」とはいかに関係するのか、なぜ「経験」に重点が置かれるようになったのかといった観点から考察を行った。

2. 研究成果

本年度は主として、「超越論的经验論」「形而上学的経験」と名指されるヴァールの「経験論」および「経験」概念を明らかにすることに取り組んだ。この成果の一部は日仏哲学会 2023 年度秋季大会において発表された^{*2}。

ヴァールは複数の著書で「経験論」について言及しているが、その経験論および経験概念は「超越論的经验論」や「形而上学的経験」と名指される特異なものである。ヴァールはこれらの概念を提示する際、後期シェリング思想やウィリアム・ジェイムズの「根本的经验論」をしばしば参照する。これらの「経験論」についてヴァールは、「所与が関係を含むことを認める経験論」と定義しつつ、従来の「経験論」の弱点を克服し、合理論を乗り越えた経験論として捉えている。かくて、ヴァールが提唱する「超越論的经验論」もまた、「超越的な基底としての「関係」を含む所与を肯定する経験論」と定義できよう。ヴァールによると、かかる経験論が合理論を乗り越えるのは、従来の経験論と異なり、我々の内面にある経験の基底、いわば判断以前の領野、「前-述定的領野」に目を向けるからだ。

こうした、いわば拡張的な経験論にヴァールが与した背景には、合理論が内在的領域に

おける実在性を認めず、超越的領域の実在性に人間を依拠させることへの問題意識があったからだと考えられる。ヴァールは、形而上学の伝統に反して、経験という内在的領域に下降しようとしているのだ。

かくて、ヴァールの思想における経験論は、哲学の営みを問い直し、新たな超越概念に迫るための役割を演じていると言えよう。

3. 今後の課題および展望

本研究課題に残された主な課題は、「合理論および現象学についてのヴァールの理解を明らかにすること」である。本年度の研究においては、この点について十分に解明できず、経験論を拡張することで合理論の克服を試みるヴァールの動機を明確に呈示することができなかった。また、本年度においては後期シェリング思想およびウィリアム・ジェイムズの根本的経験論からヴァールの「超越的経験論」に至る道筋を中心的に取りあげたが、その一方、「超越論的経験論」とはフッサールの現象学でも用いられた語でもある。それゆえ、この語にまつわる思想の系譜を明らかにするためには、現象学に対するヴァールの理解の解明が必要となる。加えて、現象学に対するヴァールの理解の解明は、ヴァールが目を向ける「経験の基底」としての「前-述定的領野」と、他の著作でヴァールが実在に接する領野として措定する「感情〔sentiment〕」の領野との関係を示すものとなろう。

さらに、ジャン・ヴァールの経験論を取りあげた本研究をさらに進めていけば、20世紀後半のポストモダン思想研究の糸口となることが期待される。たとえば、ヴァールを参照しつつ、自らの哲学を「超越論的経験論」と称したジル・ドゥルーズとの思想的連関は、本研究課題から直接続く主題であろう。本研究ではヴァールの経験論の影響については論じられなかったが、今後は、ヴァール思想そのものの解明と同時に、レヴィナス、ジャンケレヴィッチ、ドゥルーズといった後代の思想家たちとの連関も研究課題としたい。

※1 押見まり「ジャン・ヴァールの思想と実存の哲学——循環する超越と内在」（論文）

『哲学』73号、日本哲学会、2022年、176-193頁。

※2 押見まり「ジャン・ヴァールの経験論——「超越論的経験論」とは何か」（口頭発表）

日仏哲学会2023年度秋季大会一般研究発表（大阪大学）、2023年9月9日。